台湾青年

一九六一年11月22日　第三種郵便物認可　一九八一年1月5日（毎月1回5日発行）

TAIWAN CHENGLIAN

台湾独立聯盟発行

243

月　刊

台湾青年

台湾独立聯盟日本本部

MONTHLY THE TAIWAN CHENGLIAN

Published by JAPAN HEADQUARTERS,
WORLD UNITED FORMOSANS FOR INDEPENDENCE

No. 243　　1981. 1. 5

目　次

報　道　美麗島グループ圧勝
「中央民意代表」一部改選の結果……1
美麗島グループ健在なり……表3

論　説　リンケージ戦略について……張　昭　晋…6
台湾の社会問題……青木　達雄…10
陳若曦の彷徨は何を教えるか（下）……王　育　徳…13

随　筆　いつか来た道（19）……孫　明　海…28

台湾今日このごろ　聯盟と美麗島社「選挙」で共闘
全米台湾同郷会「選挙」支援の募金運動
身勝手な「外省人」立候補　他……26

美麗島グループ圧勝

「中央民意代表」一部改選の結果

いわゆる「中央民意代表」の一部改選が十二月六日におこなわれ、例によって国民党が多数を占めた。だが蔣政権は美麗島グループを抑え込むことに失敗し、同グループは国民代表四人、立法委員八人の当選者を出した。主要幹部を逮捕されながら、尚このような戦果を得ることができたことに国民党は驚いている。

この日に一部改選されたのは立法委員七十人と、国民代表七十六人であり、華僑への割り当て分は、まだ任名していない。監察委員三十二人は華僑への割り当て分が十人であり、残りの二十二人は八〇年十二月二十七日に間接選挙によって、省議会、台北市議会、高雄市議会において選出される。

国民代表の選挙には農民（三人）、漁民（二人）、労働者（三人）、工業（三人）、商業（三人）、教育（二人）、婦女（七人）各団体による改選があるが、国民党以外には選挙運動のしようのない仕組になっているので、これは「選挙」のらち外におくべきであろう。

立法委員も同じで、農民（四人）、漁民（二人）、労働者（四人）、工業（二人）、商業（二人）、教育（二人）がある。

以上のほかに、金門・馬祖地区から国民代表二人、立法委員一人が選出されたが、この地域は台湾とは関係ないので、これらも前記の諸団体と同じく、除外して考えるべきである。

その結果、本当に台湾で改選されたのは、立法委員が五十三人、そして国民代表が五十一人である。

立法委員は、五十三人中、国民党が四〇人を占め、全体の七十九％にあたる。国民代表は五十一人中、国民党が四〇人を占め、これは七十八％にあたる。

蔣政権の恣意的選挙規制

こんどの選挙は一九七八年十二月十六日におこなわれるべきものであったが、選挙期間中の動向からみて、国民党は極めて劣勢におかれていることが判明し、急拠選挙が中止された。米中国交という「非常事態」が起こったからだという理由になっているが、「非常事態」といえば、台湾は一九四九年十二月五日から戒厳令が敷かれており、蔣政権の解釈に従っても、台湾は常に「非常事態」下にあ

るはずである。その後、蔣政権は有利な地歩を固めるため、つぎのような措置をとった。

一　七九年十二月十日の高雄事件に乗じて、無党派の人士を大量に逮捕し、八〇年三月にそれぞれを叛乱罪で重刑に処し、台湾民主化運動の幹部を活動不能におとしいれようと計った。

二　これと並行して、党外人士の発行する雑誌『美麗島』、『八十年代』、『潮流』、『亜洲人』、『鐘鼓楼』などを次々に発禁処分し、党外人士の発言の場を封じた。

三　擬装交通事故を起こして、主要党外人士の立候補を阻止しようとした。

四　選挙を控えて、高浩遠台独事件、葉島蕾中共スパイ事件をつくりだし、党外人士再逮捕の恐怖を煽ろうとした。

五　党外人士の選挙運動をがんじ搦めにすべく、急いで「動員戡乱時期公職人員選挙罷免法」を制定し、八〇年五月十四日にこれを公布した。六月五日にはさらに行政院命令である「動員戡乱時期公職人員選挙罷免法施行細則」が公布され、また七月八日に設立された「中央選挙委員会」も独自にいろいろな規制措置をとり、党外人士の活動を束縛した。

選挙罷免法による規制：

1　「一人で二人以上の候補者の助選人になってはならない（48条。）」これは党外人士が連繋プレイをするのを防ぐためである。

2　「政見発表会は私設と公設の二種類にわけ、私設は公設の前におこなわれる（49条。）」このたびの選挙期間は十五日間、前期の八日間が私設で、後期が七日間である。私設政見発表会は通常屋外でなされ、聴衆は多い。公設のは屋内であるため聴衆は少ない。全候補者が演説するので、一人ひとりの持ち時間は少ないし、盛り上がりを欠く。それに公設ゆえに選挙の一番大事な最後の一週間、候補者はほとんど演説することができずに投票に移るわけだから、組織のない党外人士は苦しい。政治結社の結成を許されず、演説もままならないので、党外人士は軒並みに苦戦する。

3　「私設政見発表会は毎日六回までで、各回二時間を限度とし、候補者は現場にいなければならず、候補者と助選人以外の人は演説してはならない。時間と場所は三日前までに選挙委員会の許可を要する（49条）。」このたびの立法委員選挙は、選挙区が数県にまたがっており、移動に時間を費やすので、結局講演回数は少なくならざるをえない。しかも許可がでるのを待っているあいだに、予定の日時が過ぎ、講演できなかったケースが多くあった。

4　「候補者の印刷した名刺やビラには印刷所の名称と所在地を記入せねばならない（51条）。」かくて多くの印刷所経営者は怖けつき、一部の党外人士は名刺やビラを印刷してくれる印刷所を探すのに大変に苦労した。例えば姚嘉文夫人周清玉さんは自宅で印刷する有様であった。

5　「政見では(a)内乱罪、外患罪を犯かすことを煽動してはならない。(b)暴動で以て社会秩序を破壊することを煽動してはならない。(c)その他の刑法に触れてはならない（54条。）」一見当然な規定であるようにみえるが、政治的な解釈をされて、罪に問われる恐れ

があり、候補者は慎重に話さねばならない。(a)項に触れたら七年以上の徒刑、(b)項は五年以上の徒刑、(c)項はそれぞれの法によって処分される（86条）。

6　「外国の団体、法人、個人から援助をもらった者は一年以上、七年以下の徒刑に処される（88条）。」これは外国に居住する台湾人、台湾人の団体を含める。つまり海外の台湾人は選挙を支援してはならないというのである。

「施行細則」による規制：

1　「助選人」の人数は三十人を越えてはならず（45条）、宣伝カーは四台まで許される（52条）これに反して、蔣政権は国民党組織を通じて、活動できることになっている。

2　「候補者と助選人は道路上を群をなして歩いてはならない（55条）。」

中央選挙委員会による規制：

1　「『美麗島』の文字、言葉をつかってはならない。」同委員会によるこのような決定がでたのは選挙運動期間に入る間近であったため、党外人士は印刷済みのビラを警察に押収されたり、あるいは印刷のやり直しをさせられ、機を逸した人も相当にあった。

2　「街頭で政見発表会を開くには、沿道のすべての人家の同意が必要である。」一軒でも同意しない家があれば、街頭演説は不可能になる。一旦、党外人士に同意を与えながら、蔣政権が圧力を加えたために、同意を取り消すこともしばしばであった。

海外における対応

蔣政権による以上の周到な準備と規制によって、党外人士はほとんど身動きがとれなかった。

この情勢下に、台湾独立聯盟は、美麗島社と連合して、十一月八日、米国に「選挙期間島内工作指揮中心（センター）」を設立し、聯盟総本部張燦鑫主席が総責任者に、そして美麗島社許信良社長が副責任者になり、こんどの選挙に対処した。具体的には海外各地から島内に電話を入れて、党外人士への投票を依頼したり、『快訊』（速報）を発行して、選挙に関わる最新の情報を各地の同郷に提供した。

周清玉さん最高票で当選

こんどの選挙では、蔣政権は全力を傾注して、美麗島事件で逮捕された人たちの留守家族の立候補を断念させようとした。立候補すれば、軍事裁判ですでに判決がなされている「財産没収」を執行するとか、新しい逮捕者がでるとか、留守家族の身辺に危険が降りかかるとか、脅迫した。この脅迫に一部の留守家族は立候補を断念した。それでも姚嘉文夫人周清玉さんは台北市から国民代表に立候補し、張俊宏夫人許栄淑さんは第三選挙区南投県から立法委員に立候補した。留守家族の一人で立候補した者に黄信介氏の弟、黄天福氏がおり、台北市から立法委員に立候補した。だが、黄天福氏は現職の国民代表であり、政治家として独立しているので、厳密な意味で、留守家族とはいえない。

国民党は美麗島高雄事件の軍事裁判を民衆がどう占うのか、この一戦にあるとみて、周清玉、許栄淑の両人を落選させようと、全力を傾注した。私設政見発表会においては、場所を提供した者に圧力をかけて、取消させた。例えば、許栄淑さんが一日三個所での演説を申請したにもかかわらず、最初の三日間は二個所しか許可されなかった。四日目は一カ所しか許されず、五日目は一カ所も許されなかった。こうして彼女らは苦闘を強られたが、彼女らの演説会には常に数万人が集まった。私設最後の政見発表会のときなど、周さんのは十万人、許さんのは六万人も集まっている。両人とも当選しとに周清玉さんは全台湾最高、十五万三千票で当選した。民衆は彼女の夫、姚嘉文氏への喝采を選挙で表したのである。

当選者はつぎのとおりである。（★印は「美麗島」関係者）

国民代表：（五十一人のうち、党外人士は十一人）

台北市（七名のうち、党外人士は二人）

党外人士　★周清玉、★王兆釧

国民党　黄書瑋　李黄恒貞　呉永成　喬宝泰　陳烱松

高雄市（三名のうち、党外人士は一人）

党外人士　許嘉生

国民党　湯阿根　許仲川

台北県（七名のうち、党外人士は一人）

党外人士　★陳静琴

国民党　陳金讓　連勝彦　郭政一　趙長江　郭儒鈞　謝隆盛

宜蘭県（一人のうち、党外人士は一人）

党外人士　蕭清海

桃園県（三人）

国民党　趙昌平　林木連　簡欣哲

新竹県（二人）

国民党　范揚恭　林政則

苗栗県（一人）

国民党　張茂基

台中県（三人のうち、党外人士は一人）

党外人士　楊順隆

国民党　林欽濃　陳川

彰化県（三人のうち、党外人士二人）

党外人士　洪葉玉貞　李読

国民党　陳陽徳

南投県（一人）

国民党　林源朗

雲林県（二人）

国民党　林俊恵　呉修量

嘉義県（二人）

国民党　黄俊博　林健治

台南県（三人のうち、党外人士は一人）

党外人士　林丙丁

国民党　王鼎勲　葉棟樑

高雄県（三人のうち、党外人士は一人）

党外人士　★林応專
国民党　林栄治　劉尚修
屏東県（二人）
国民党　黄安慶　紀天発
台東県（一人）
国民党　鄭烈
花蓮県（一人）
国民党　楊守全
澎湖県（一人）
国民党　鄭光博
基隆市（一人）
国民党　李伯元
台中市（一人）
国民党　林平源
台南市（一人）
党外人士　陳森茂
山地同胞（二人）
国民党　武栄盛　林栄明

立法委員：（五十三人のうち、党外人士は十一人）

台北市（八人のうち、党外人士は二人）★印は美麗島関係者
党外人士　★康寧祥　★黄天福
国民党　紀政　雷渝斉　李志鵬　黄聯富　林鈺祥　周文勇
高雄市（五人のうち、党外人士は一人）
党外人士　★蘇秋鎮
国民党　王清波　于樹潔　方啓栄　張栄顕
第一選挙区（八人のうち、党外人士は三人）
党外人士　★黄煌雄　鄭余鎮　蔡勝邦
国民党　林坤鐘　蔡讃雄　呉梓　周書府　周大業
第二選挙区（六人のうち、党外人士は一人）
党外人士　★張徳銘
国民党　呂学儀　劉碧良　温錦蘭　李天仁　古湖玉美
第三選挙区（九人のうち、党外人士は一人）
党外人士　★許栄淑
国民党　謝生富　劉松藩　沈世雄　許張愛簾　洪昭男
林庚申　周基順　林炳森
第四選挙区（八人のうち、党外人士は二人）
党外人士　★許哲男　黄正安
国民党　游栄茂　林聯輝　洪玉欽　蕭天讃　郭俊次　李宗仁
第五選挙区（五人のうち、党外人士は一人）
党外人士　★黄余綉鸞
国民党　鍾栄吉　李明相　王金平　黄河清
第六選挙区（二人）
国民党　郭栄宗　饒穎奇
山地同胞（二人）
国民党　林通宏　華愛

リンケージ戦略について

張　昭　晋

米中軍事協力は

昨年はじめからアメリカ政府が徐々に進めてきた外交路線がある。対中、対ソ等距離を保つべきだという均衡アプローチ論に代って、アメリカは中国を軍事面を含めて積極的に支援すべきだという戦略論の登場である。

新大統領となるレーガン氏はこうした路線に警戒論を述べてきた。勿論、かれだけではない。米中軍事協力を押し進めていくことに反対の主張をした者は多かった。そこでレーガン新政権がはたしてどのような道を選ぶのかは、われわれに限らず、だれもが関心を持つ問題であろう。

レーガン氏の前任者であるカーター氏は、その政権の発足にあたって、フォード・キッシンジャー外交を否定し、秘密外交をやめ、オープンで、デセントな外交を展開すると主張した。またキッシンジャーが説く勢力均衡外交ではなく、新しい世界の秩序を築く外交をやりたいと述べた。さらにまたキッシンジャーのすすめた対ソデタント外交では、アメリカが一方的に譲歩をしすぎたと非難した。

それから四年たったあとはどうか。カーター氏が出発のはじめにあたって述べた外交構想がひとつとして実を結ばなかったことは認めざるをえまい。カーター氏は脱キッシンジャーをあまりにも強調しすぎた嫌いがあった。かれの外交面の右腕であり、もしカーター氏が再選されていたら、補佐官のポストから国務長官になったであろうブレジンスキー氏にしても、キッシンジャー路線の亜流、物真似と言われることを回避しようとしたようであった。

卵が先か、ニワトリが先か、キッシンジャー氏もカーター外交を目の仇にした。選挙の終ったあとに、かれは演説し

て、レーガン氏の勝利は「アメリカが過去の外交政策を謝罪している」とのメッセージを世界に送ったものだと言い、アメリカの外交政策はキッシンジャー外交に戻ることになると述べたのである。

たいした鼻息だが、キッシンジャー氏がはたしてニクソン、フォード時代にそれほど見事な外交を展開したかと言えば、これまた疑がわしい。キッシンジャー氏の回想録は、自分の政策がいかに正しかったかを繰り返して述べ、すべての誤りを後任のバンス国務長官のせいにするといった調子のものである。

かれの自画自賛とは逆に、評者の多くは、キッシンジャー外交は結局のところ失敗だったのだと述べ、バーバラ・タックマン女史にいたっては、かれがあわてて回顧録を出版したのは、大いに自己宣伝をして、共和党政権の国務長官になりたいためだけのものだと酷評している。

それはともかく、カーター外交の失敗は、インデセントな外交をやらない。即ち、リンケージ外交をやらないと述べ、それに縛られたことにあるように思える。

そこでだが、リンケージとはなにか。交渉の場において、二つの別々の事柄を連関させ、その一方を他への圧力として利用することである。キッシンジャー氏は、一九六九年の米ソ外交の折に、はじめて導入した戦略だと述べる。

このような考えはキッシンジャー氏の専売特許といったものではなかろう。だが、キッシンジャー氏がこの戦略をリンケージと名付け、かれが好んでこの言葉を使ったため、いつかキッシンジャー外交の基本的アプローチとなってしまったのである。

カーター大統領はこのリンケージ外交を策略的なものだと非難した。これはカーター氏の人柄にもよるのであろう。かれは国内政策においても、問題を解決するのに政略の重要性を無視した。正しいと思ったことはあくまで押し通すといった信念の持主にしてみれば、政略とか、リンケージとかは肌が合わなかったのである。

ところでキッシンジャー氏はカーター政権がリンケージを使わなかったことを批判してきた。たとえばB1の問題がある。レーガン政権が登場すれば、その製造計画が復活するとみられている新しい戦略爆撃機である。カーター大統領がこの爆撃機の生産延期を決定したことをキッシンジャー氏は非難して、戦略兵器制限交渉との関連を考慮することのない、交換条件なしの一方的譲歩だと批判したのである。

キッシンジャー氏がもっとも激しく批判したのは、カーター大統領の金看板であった人権外交である。キッシンジャー

氏は、人権外交はアメリカの他の政策とのリンケージを失なっては全く無意味であると批判した。

たしかに台湾に対する人権外交がなんの効果も収めなかった大きな原因は、カーター政権にリンケージの認識がなかったからである。韓国では朴以上の朴体制をつくりだすことになってしまったし、エチオピアでは逆にソ連の乗じるところになり、アフリカの新しい火薬庫としてしまったし、イランの場合も全く同じである。

包括的な戦略

ところでキッシンジャー氏はリンケージ戦略があまりに策略的だ、インデセントだと批判されたことを気にもしていたようである。かれはリンケージの概念にはもうひとつあり、その方がはるかに重要なのだと説く。

かれは、今日の相互依存の世界においては、大国の行動は不可避的に相互に関連し、その問題を越え、地域を越えて影響を及ぼし合うのだと言う。たとえばある地域でアメリカの無力さをさらすことは、世界の他の地域におけるアメリカの信頼性に影響を与えると述べるのである。それ故にリンケージとは、全世界で起きる出来事を全体的な見方でとらえることなのだと説く。

これもリンケージなど持ちだすまでもなく、当然といえば当然すぎる話であろう。だが、キッシンジャー氏に言わせれば、そんなに簡単なものでもない。脱キッシンジャーを強調していたカーター政権がリンケージ戦略を採用するや、またもキッシンジャーにかみつかれることになった。リンケージ戦略の猿真似だと批判したのである。

ソ連がアフガニスタンに侵攻するや、アメリカ政府部内では、ソ連をけん制するために、中国の軍事強化を支援しようという空気が強まった。リンケージ戦略をとろうという訳である。アメリカの国防長官が訪中し、中国の党中央軍事委秘書長が訪米して、米中軍事協力に拍車がかかった。国防省内で中国派の筆頭と目されたホルブルック国務次官補が対中六原則を発表し、強力な中国はアメリカの利益だと説き、つぎのように言った。

「中国をソ連の影響を相殺する手段として考えた七十年代初期の三角外交はもはや中国との関係をみる上で適切な枠組ではなくなっている」

ところが、これに対して、キッシンジャー氏は、アメリカはチャイナ・カードを使うべきではないと述べた。ソ連との紛争で中国を使うという考え方は、いったんアメリカがソ連から譲歩をかちえた場合には、中国を捨てることを意味する

と語り、北京を利用してソ連を刺激するようなことはすべきではないと説いたのである。要するにリンケージのもっとも肝心な概念である包括的な戦略思想が欠けているというのである。

ダレス国務長官

あるいはカーター氏が再選されていたならば、アメリカは中国との軍事同盟への道を進むことになったかもしれない。だが、レーガン政権はそのような路線を採ることはあるまい。

レーガン氏に対しては、「タカ派大統領」「早射ちレーガン」といったお馴染みの批評から、いや、アイゼンハワー・スタイルの大統領になろうといった予測も登場している。かつてアイゼンハワー大統領に対する評価はそれほど高いものではなかった。それがいまとなれば、アメリカの栄光の五〇年代を象徴する大統領となり、信頼される父親のイメージを持つ大統領だったと賞賛されるようになっている。

そこでだがカーター外交の失敗の理由はどこにあったのか。なによりも一貫性がなかったことであろう。外交担当の大統領補佐官と国務省のあいだに政策の混乱があった。

ポーランドの外交官の子として生まれたブレジンスキー氏は、勿論のことソ連嫌いであり、本質的にはタカ派だった。昨年二月にかれがパキスタンを訪問し、アフガニスタン国境を訪れたとき、かれは中国製AK47自動小銃を構えてみせ、写真をとらせたものだ。また二年前にかれが中国を訪ね、万里の長城に遊んだとき、部下たちに、上までのぼる競争をしようと言い、つぎのようにつけ加えた。「びりになった者は、エチオピアに送り込んで、キューバ人と戦わせるぞ」

対イラン政策の失敗の最大の原因は、強硬論を説くブレジンスキー氏と、それに反対する国務省とのあいだの意見の対立にあった。ブレジンスキー氏はイランの反国王デモに対して、武力鎮圧を説いた。いよいよ見込みがなくなっても、かれはなお軍事クーデターを起こせないかと、イラン駐在大使に電話をかけた。それが正しかったか、正しくなかったかはべつとして、問題はアメリカ政府に一貫した方針がなかったことであり、優柔不断だったことである。

レーガン氏がアイゼンハワー大統領になれるかどうかは、かれがダレス氏のような強力な国務長官を持てるかどうかということにあろう。ダレス氏のように外交責任者がただひとりでない限り、リンケージ政策が効果を発揮することはないし、再びイランの失敗を繰り返すことにもなろう。

〔投稿〕

台湾の社会問題

青木達雄

一国の経済体制と政治制度のもとに、その国の社会の中で、政治的圧力と貧富の差の拡大による経済的、精神的な貧困が生じた場合、これを重大な社会問題としてとり上げ、その解決のための適切な政策を、為政者は早急に立案しなければならないはずである。今台湾の人々は、不幸にもこのような状況の中で喘いでいる。

一九四九年、中国大陸の国民党政府（国府）が台湾を支配すると、やがて日本の残置施設を含めて、この国の工業設備を掌握し、教育、技術水準の高い台湾人労働者を駆使し、工業の発展を意図した。それは台湾という狭い国土と、激増する人口に対する当然の政策であろうが、工業の官営化による工業利潤の独占は、国府財政を豊かにすると共に、その恩恵は、戦後大陸より移住してきた中国人達に対する、その経済生活の安定剤としても作用することになる。かくして、その後の国府の政策には、工業の発達が優先し、社会資本への投資も、台湾に住む人々のための公共の福祉よりは、工業化を促進する投資とみなすことができる。その成果は一九六〇年頃より現われ、一九七六年には、全輸出額の八五％までが工業製品で占めるまでに至った。このようにして台湾は、貿易立国による中進国としての地歩を固めたが、その反面、従来の農業国としての台湾を軽視し、台湾の農業と台湾人社会の認識を欠いてしまう。それは、国府による不適切な農地改革の実施がその例である。孫文の三民主義による「耕者有其田」をスローガンに、一九五三年の農地改革は、自作農の創設であったが、そのための土地は、台湾人地主から徴収した農地と、濡れ手にあわの、台湾占領による接収公有地であった。これをもとの持ち主の台湾人に売りつけ、地主への土地補償は、その七〇％を現物支給の土地債券で、残りの三〇％は公営企業株券であったが、株券の配当は少なく、その後のインフレにより、株券は次第にその価値を失ってゆく。

この改革で台湾人は、徴収された先祖の土地を国府から買戻すことになり、その利ザヤにより国府の財政は潤い、その後の台湾の工業化、軍事化に一層の拍車をかけることになる。一方、自作農は、一九四九年の全農家に対する比が三六％であったのが、一九五七年には六〇％と増加するが、それはいたずらに小規模農家を増やした

に過ぎず、零細化した自作農は、やがて孤立的、閉鎖的な伝統農業の性格を強めてゆく。このことは農業経営の機械化、共同化等の障害となって、農業の近代化への道を遅らせることになる。

現在、台湾における農家一戸当りの平均収入は、非農家に比べて相対的に低く、その上、農民にとっての生命である農地は、急激な工業化による工場廃水で、全農地の一四％（一九七九年）が汚染されてしまっている。また最近の報告では、主要河川二四の中で、その一九までが水質汚染されているという。農民の犠牲の上に成り立つ工業化は、このような被害を与えつつ農村を疲弊させ、年間一万ないし二万人の農民が先祖の土地を捨てて去ってゆく。一九六〇年代には、農業労働者は全労働力の三六％となり、一九八〇年にはさらに約二三％と減少し、戦後の人口増加に見合う食糧生産に支障をきたすほどに、農村の労働力不足が深刻な問題となっている。

このような現状をよそに、過大な軍事力に要する膨大な軍事費と国際的孤立をカムフラージュするために、国家予算の半分を費やしていることは、いかに台湾人が、重税と社会福祉の恩恵なき社会で苦しんでいるかをうかがわせる。このような状況は、かつてのイランにおけるパーレビー体制下に、急激な近代化を推進して失敗した、イラン革命前の状況と似通っていることが感じられる。農民の一部は、農村の未来に失望し、現実の生活苦からやむなく故郷を去って、失業労働者として都市に向かうが、それは過密な人口集中と、不健全な都市社会を生み出すに他ならない。

台湾は国際比較の中で中進国と言われているが、それは発展途上国から先進国への移行の過程を意味し、そこには中進国共通の問題である途上国、先進国両者の悩みを同時にかかえている。途上国が先進国を指向して急激な脱皮を計るとき、そこには種々の矛盾と不安定な社会の動揺が一般にみられる。農村の貧困、都市のスラム化、貧富の差、環境の破壊等である。戦後の台湾経済が高度な成長を遂げたのは、その経済基盤が小規模なるがため、それが顕著に現われたのであって、それに伴って、台湾人の生活が豊かになったとは決して言えない。一人当りの実質消費水準は、人口の増加、インフレの昂進を考えれば、高度な成長率に反して逆に低いと言わざるを得ない。因みに台湾人の貯蓄率は一割弱と言われ、他国に比して非常に低く、経済生活の不安を感じさせる。また、一九七六年における最低所得層と最高所得層の消費支出の比率は、一対四とその格差は大きく、一九七八年の納税者の〇・五％は、全所得税額の二一・四五％を占めていることから、工業化、都市化によって恩恵を得ている一部の支配層、エリート層に対して、その犠牲になった多数の農民、零細企業、賃金労働者との階層の分化、貧富の差をみることができる。

工業化の進展は次第に資本の集中を促し、労働者は低賃金に甘んじて長時間労働を余儀なくされ、大部分の工場が九時間以上の労働を強いている。さらに労働環境の劣悪と、労務管理の不完全なことから、労働災害は増加の傾向を辿り、一九八〇年までの最近五ヵ年間に、大小四万余の工場調査の結果、死亡者一、一二三人、身障者八、九〇四人、その他の負傷者二〇、七一七人となり、改めて労働

災害の深刻さに目を向けざるを得ない。

現在、戒厳令下の台湾における労働組合は、労働者のための唯一の拠りどころであるにもかかわらず、その結社の自由は禁止され、形式的、非自主的な御用組合があるだけで、それもスト権はなく、スト行為は一九五三年の妨害国家総動員懲罰暫行条例により、最高七年の懲役に科せられる仕末である。正に骨抜きの労働組合である。

工業化に伴うマイナス面は一般市民にも及び、最近は先進国並みの公害現象が起っている。一九七九年の一四九三工場の調査では、その中の一〇九七工場が廃水処理の不完全工場と言われ、一九七八年の中国石油化学工業（公営）のシアン化水素の中毒事件では、約四〇〇人が被害をうけている。また翌年の一九七九年には、彰化油脂企業の米糖油公害で、多数の集団皮膚中毒症患者が発生したが、これは日本のカネミ油脂の公害事件との関連性から、国府はこの事件をひたすら隠蔽している。その他、台北市松山小学校の工場排煙公害では、全生徒の七〇％が呼吸器官障害を起すなど、まだ大小さまざまな公害が隠され、あるいは潜在しているに違いない。このような公害、あるいは河川、農地の汚染を考えるとき美しい台湾の国土も、次第に蝕まれているように思われる。

台湾の人口構成は、途上国一般にみられる高度な出生率により、若年層の多いピラミッド型であったが、最近は、出生率の低下による先進国並みの、つりがね型に変わりつつある。これには、戦前よりの医療施設の普及が考えられるが、それは日本統治時代に、台湾のエリート層の子弟を医学研究に志向させた結果に他ならない。にもかかわらず、最近の老人死亡率の上昇をどのように考えるか。現在六五才以上の老人の自殺率が、台湾では他国に比べて非常に高い、と言われる。老人自殺の心理的要因を、今の台湾社会の情況の中で考えるに、戦後の日本統治からの解放と、光復を旗印にした国府統治への期待が余りにも齟齬し、一党独裁の政治的圧迫感、また急激な工業化、都市化による貧富の差、貧困、人間関係の疎遠等による社会的不安感が老人を追いつめるのであろう。

一九七八年には、この一カ年間で刑事事件の発生が四八、六四〇件となり、一五年来の最悪な情況と言われ、また交通事故件数は年毎に増加し、台湾はアジアの中で最も交通事故の多い国とされている。

このような政治、社会の矛盾を、台湾人は手を拱いているわけではない。国府に対する批判は、戒厳令、選挙法等により弾圧されているが、彼等は次第に批判勢力の結集を試みている。一九四七年の二・二八事件にはじまり、中壢事件等を経て、最近の高雄事件に至る一連の動きにそれをみることができる。この批判勢力の中に、戦後の若い世代の力が最近顕著になってきた。彼等は、戦後の国民党教育の洗礼をうけたにもかかわらず、いま反国民党側に立っていることは注目すべきである。現実の国際情勢の中で台湾のおかれた地位を感じつつ、無国籍的意識と植民地的な心情傾向の中から、彼等は反抗的、脱大陸文化の気風を漂わせ、オートバイに乗り、ロック音楽を聞く彼等の双肩には、未来の台湾がかかっているが、その前途は苦難の道に通ずるものがある。

陳若曦の彷徨は何を教えるか（下）

王　育　徳

小説の主人公に台湾人

陳若曦が八〇年に発表した二篇の作品――「路口」（『中文月報』二、三月号に連載、加筆して『台湾文芸』六月号に転載）と「向着太平洋的彼岸」（『明報月刊』九月号より連載開始）――はどちらもアメリカに住む台湾人を主人公にした小説である。彼女の関心が海外の台湾人に移ってきていることを示すもので、われわれにはたいへん興味のあるところである。

文革期の中国のことは随分と書きまくって、そろそろタネが尽きる頃だし、人々の興味も林彪・四人組打倒後の中国に移ったから、陳若曦としても何か新分野の開拓を考えたいところであろう。

折しも彼女は八〇年一月に十八年ぶりで台湾に帰った。美麗島事件やその直後の林義雄家族惨殺事件に深い衝撃を受け、歴史的な政治転変に翻弄される台湾人の運命に改めて思いをはせたとき、新しいインスピレーションが湧いたのかもしれない。

できた小説が原稿を依頼した香港の中国人雑誌社の意に沿うものであったかどうか。また『尹県長』の評判に魅かれて読んだ中外の読者に、別の感動を呼ぶことができたかどうか、それはどうでもよい。

私はただ彼女が自分をごまかさず――台湾人だと知られることを恐れたり、逃げるにしかずと帰化したりする人の何と多いことか――台湾人という集団を正面からとらえ、その生きざまを彼女なりに描き解釈を与える、その姿勢と勇気に満腔の敬意を表する。もちろんその描写と解釈には、賛同しかねる部分もある。反感すらおぼえることもある。が、これは彼女の書き得、表現の自由ということで、しかたがない。

「路口」は辻の入口のことで、主人公がそこで立ちどまったという意味のようである。余文秀は三十五歳の女性、十二歳になる娘がある。台湾は南部東港の生まれで、独立運動者の夫のあとを追ってアメリカに渡った。

中篇小説

路口

NO THROUGH ROAD

作者按：這篇小説寫於十一月初。十二月傳來台灣大批黨外民主人士被捕的消息，令人痛惜。謹以此稿獻給被捕的作家王拓和楊青矗。

陳若曦

夫と知り合うまで、彼女は極端に政治を恐れ、かかわりたくないと思っていた。父が二・二八で生死不明となり、おかげで母は小学校教員をやめて魚塭（養魚池）をやり、苦労して彼女を育てあげたからである。

渡米した余文秀は夫がいつしか理想を棄てて商売に熱中し、小金を儲けてはひとり悦にいる、つまらん男になっているのを見て、失望し離婚する。

余文秀はいまはワシントンDCに住むおばの家に同居している。陳映真釈放要求キャンペーンで、五十をすぎた大学教授の中国人方豪と知り合い、好意をよせる。方豪はリベラリストで台湾の人権問題に関心をもつと同時に、中国の「四つの近代化」を支持している。

今晩は方豪がデイトに誘いに来ることになっており、余文秀はまるで小娘のように浮き浮きしている。そこでおばの家族の構成が紹介される運びとなる。おばの娘文娟は華僑ピンポン選手団の一員として中国に行き、北京科学院で短期の研究に従事するフィアンセの呉偉雄に会えたのを喜んでいる。おじは双十節訪問団に参加して台湾に帰っている。まるで政治的精神分裂病の一家だが、これは私の経験に照らして、全くのフィクションとはいえない。

二人はジャパニーズ・レストランで豪勢な晩餐をとるが、始めの甘いムードも彼女の方からもち出した無粋な政治の話で白けてしまう。別れた前夫の影響で彼女はいまや人権運動家に変身していたのである。

余文秀が方豪に魅かれたのは、陳映真の釈放を要求するキャンペーンで、方豪が積極的に動き、多くの友人に呼びかけて蔣経国に手紙を書かせた、その正義感と行動力であった。同じような事件が大陸で起っている。民主闘士魏京生が十五年の判決を受けたのだ、余文秀はいても立ってもいられない気持である。

彼女は方豪に陳映真のときのように皆に呼びかけて鄧小平に手紙

を書こうとせがむ。しかし方豪は彼女の期待に反して反応がない。方豪は国務院の招聘で年末に中国に渡ることになっていた。自分の渡航と滞在に支障が出てはという打算が働いた。そうと知って余文秀の方豪に対する尊敬と信頼は一挙に崩れ去った。

ちょうど東港の母から事業に人手がいるといってきたのを機会に、余文秀はアメリカを引揚げて台湾に帰る決意をする。旅行社にキップを予約する前夜、余文秀は無力感にさいなまれながらも「台湾東港人」として鄧小平あての嘆願の手紙を書いた。

小説の前置に「この小説は（七九年）十一月初めに書かれた。十二月に台湾で多くの党外人士が逮捕されたというニュースが伝わった。痛惜にたえない。この小説を謹んで逮捕された王拓と楊青矗に捧げる」のコメントがある。

まさにこのコメントが語るように、これはあまりにも作為的な政治小説である。前号に触れた林恒の「人権と正義のために奔忙する陳若曦」（『中報月刊』八〇年二月号）で、陳若曦が海外中国人の打算的な政治姿勢を批判していることがわかったが、その批判を小説の形で書いていたわけである。もっとも不自然なのは、それほどに強烈な政治意識をもつ女性が、東港で魚塩の経営を手伝うために台湾に帰るという結末である。

帰って陳菊や呂秀蓮のあとを継いで人権運動をやるとでもいうならまだ話はわかる。しかしその場合には、鄧小平に平気で手紙を書いたことがまずい結果になろう。失敗作といえるのではないか。

独立運動に反感

「向着太平洋的彼岸」は『明報月刊』に連載が始まったばかりで、どんな展開になるか、これからが楽しみだが、かなりの長さになることが予想される。登場人物が複雑にいりくみ、その生活背景と思想は多様で、表にもしないとその関係がうまくつかめないほどである。

主人公の林以貞は台南市出身で、最近夫に死なれ、蘇台と蘇中の二人の大きい男の子がいる。彼女は十一歳のとき父母につれられて日本に渡った。父母は日本で死んだが、自分は北京の大学に学び、卒業後中国で教えた。その間に蘇徳清と知り合って結婚した。蘇徳清は台中の人で、イギリスに留学して医学を学び、五〇年代の初めに中国に〝回帰〟した。文革中迫害を受け体をこわした。七六年春ようやく出国を許され一家でアメリカに移住したが、翌年病死した。「中国人であることを忘れるな」がその口癖であった。

蘇徳清には蘇徳明という兄がおり、貿易会社を経営するほか、大きいマンションを所有している。妻昭娥とのあいだに二人の娘がおり、上はアメリカ人と結婚して東部に住んでいるが、下は目下サンフランシスコの豪商の広東人の一人息子万保羅と恋愛中で、若い二人は英語で恋を語る。

ゴールデンブリッジ大学の法律の教授で、蘇徳明の会社の法律顧問をやっている喬健光は山東人で、アメリカ人の奥さんと離婚し、息子が蘇台や蘇中と同じ年頃ということもあって、林以貞母子と親

しいつきあいをしている。七〇年代の初め中国に渡ったとき、蘇徳明に頼まれて蘇徳清の消息をさぐり、続いて出国を手伝った。

蘇徳明のマンションの一ユニットを借りているのに呉夫婦がいる。呉は独立派で、蔣政権を擁護する呉徳明を右派、林以貞を左派とよんでいる。そして左派は右派より救いがたいという。

林以貞には以偉という兄と以烈という弟がおる。以偉はかつて市議員に立候補して落選し、のちに叛乱容疑で八年も刑務所にいれられ、出獄してまもなく病死した。未亡人と一人息子は台南にいるが、アメリカの親戚と連絡を絶っている。以烈はアメリカに移住して姉のところに身を寄せているが、呉以上の独立派で、高雄事件後どうやら「台湾建国聯盟」に加入したらしい。

二篇の小説に登場する台湾人は、出生と行動圏が台湾、中国、日本、アメリカ、ヨーロッパにまたがり、政治的立場も独立派あり、〝祖国統一〟派あり、蔣政権擁護派ありで、その生活習慣も少しずつ食い違っている。台湾人の悲劇であるが、一方これはこれで一種のコスモポリタンになりつつあるのかと変に感心させられる。そういえば、私が資金カンパで台僑のあいだをまわるとき「いや、地球は狭くなった。台湾人だ中国人だといって争うことはないよ」と偉そうな口をきく人に出会ったのは一人や二人ではない。

台湾人自身不感症になっているが、試みにどの一省の中国人でもよい、かれらがこのようにあちこちに生まれ、世界各地をさまよい、政治的立場を異にし、いろいろと将来を思い患うことが考えられようか。しかしこれはまた別な観点に立てば、台湾人は中国人のように大陸と盛衰をともにするべく運命づけられておらず、努力次第で独自の輝しい将来を拓く可能性が残されているということでもある。

きわめて残念なことに、陳若曦は独立運動に対して理解がない。理解がないばかりでなく、反感を示している。小説の中にきまって独立運動者が出てくるが、かれらは戯画化されるのでなければ醜悪化して書かれるため、単純な読者に対して、さぞかし悪い影響を与えているのではないかと心配だ。

例えば、これはすでに『美麗島週刊』二号（八〇年九月六日）の温萬華「路口以後的余文秀——兼論陳若曦小説中的台湾意識」の中で指摘されたことだが、陳若曦の独立運動者に対する反発がたぶんに感情的なものであることを示唆する部分がある。

残念なことに、彼女（余文秀）は自分が接触した何人かの独立運動者は多かれ少かれ親日的傾向をもち、わざと或いは無意識のうちに日本文化の薫陶を受けたことの優越感をちらつかせていた。いまはやりのアメリカ崇拝思想よりもひどいものがあるようだ。文秀は疑わざるをえない。この手合いの独立運動がかりに成功したら、うるわしの台湾は形を違えた日本の植民地になりさがってしまうのではなかろうかと。（『中報』二月号）

困った反日感情

私の知っている独立運動者の中にそんな人はいないのだが、そう

いえば陳若曦の日本嫌いは「路口」の中で、方豪と余文秀の二人がジャパニーズ・レストランで食事する場面の描写によくあらわれている。

そもそも日本料理は彼女（余文秀）の口に合わないらしいのであるが、折角の日本情緒――タタミやアンドンや低いお膳やウェイトレスの着物も好意ある描写をされていない。私の誤解であってほしいと思うのだが、陳若曦本人、そして彼女と同年輩、さらに若い世代の台湾人は、一般に反日感情をもっているようだ。

いつかTBSテレビで『さよなら再見』の著者で、著名な郷土文学作家黄春明（一九三九年生まれ）のインタービューが放映されるのを見たが、激しい口調で日本の経済侵略、文化侵略を批判するのに驚いた記憶がある。

日本語もよく知らず日本の実態もよくわからないかれらがなぜこうも反日感情をもつのか、正しい台湾と日本の関係を考える上で、困った問題である。

日本が戦前の軍国主義や戦後のエコノミック・アニマル的経済的発展で、世界の多くの国々から憎まれ妬まれているのは、日本人には不満もあろうが、いわば「一般的庶民感情」というもので、簡単に手がつけられない。しかし遠いヨーロッパや東南アジアと違って、きわめて近い関係にある台湾で、社会の中堅となる若い知識人が簡単に「一般的庶民感情」に流されてはいけないと思う。

とくに気をつけるべきは、蔣政権の反日教育にあおられるようなことがあってはいけないことである。日本は野蛮な東夷で中国を侵略したばかりか台湾を植民地にした。敗戦してもアメリカのおかげで復興し、隙を見て台湾に失地回復しようとしている……といった反日教育がずっと続けられてきた。

この反日教育は同時に二つのねらいをもっている。一つは、悪いことはすべて日本のせいにして自分の責任を逃れ、一つは、台湾人の中国人意識をかきたてて自分に忠誠を尽させようとする。

これを無力化するには、蔣政権に対する正しい認識が必要であるほかに、日本に対する客観的で科学的な分析が欠かせない――五十一年間の植民地支配は、蔣政権の宣伝するように何から何まで悪かったのか。ほんとうに台湾で失地回復しようとする野心があるのか。

蔣政権に対する正しい認識は、美麗島人士の裁判でもわかるように、近年台湾人のあいだにとみに深まった。しかし日本に対する分析研究はほとんどなされていない。これは被植民者の台湾人として気の重い作業である。やればすぐさま「日本の走狗だ」といった誹謗中傷が飛ぶ。といってたじろいでいると、いつまでも「半分の理論」でしか蔣政権の反日教育に太刀向うことができない。

「帰」の中の描写

独立運動者に対する描写では「帰」の中の一段がもっとも長くて詳しい。

方正は続いて新生夫婦にどんな人が大陸を訪問したか知らせた。夫婦はそこではじめてこの夏は中国とアメリカの民間人の交

流が空前の盛況を呈し、何人かの知り合いが来たことを知った。
「もう少しで忘れるところだった。辛梅、あなたの同郷で同窓の魏明が年末に来ることになっているよ。彼はすでに人を介してあなたの居所をさがしている」
「魏明？」
辛梅は驚いた。
「彼は独立運動をやっているのよ、来るのを許すはずないでしょ」
方正は大声を立てて笑った。
「事物は絶えず転化するのだ。中国が国連に入り、ニクソンが中国を訪問してからは、『台独』は意気沮喪し今では青菜に塩で気息えんえんというところだ。魏明はとっくに百八十度の左旋回をして、現在は台湾人の中の大左派だ」
事物は確かに絶えず転化する。辛梅は賛同しないわけにいかない。人間社会の変化はもっとはやい。魏明も南投県人で辛梅と中学、高校が同じであった。もう一人クラスメートに楊義勇がいて、いっしょに台湾大学に入った。同郷の上同窓ということで三人は台北でずっと仲よくしていた。魏と楊は兵役を終えるとやはりアメリカに留学し、すぐに「台独」の組織に入り、積極分子となった。とくに魏明は辛梅が四川人と結婚したことから仲間はずれにし、さらに彼女の思想が左傾しているのを知って「台湾人の叛徒」とそしった。あれから四、五年しかたっていないのに、彼もまた「叛徒」の道を歩もうとは。彼女は楊義雄の消息を尋ねたが、方正はそれは知らないという（七七年六月号・六回）。

間接的な不遇の告白

あいだにほかの話が挟まっていよいよ魏明が辛梅を訪ねてくる場面である。「外賓」が来るというので辛梅の狭い宿舎は、夫の陶新生や学校の同僚が手伝いに来てきれいに整頓される。党員の上司は辛梅に「外賓」と応待する心得を注意する。約束の八時より少し遅れて、魏明は二人の幹部につきそわれて姿を見せる。あいさつが終ると二人の幹部は気をきかせて、外にまたせてあった車にもどる。
「四、五年会わないうちに君はすっかり貫禄がついちゃって、魏さん」
新生は魏明のアゴを見てほほえんだ。
「どうしようもないな。アメリカでは毎日節食しているんだが」
魏明はきまり悪そうに自分の脂ぎった顔をなで、頭をさげてあい色の綿入れの下でふくらんでいるお腹に目をやった。
「君たち国内は随分食べものがいいね。北京からずっと食べ通しでもう三ポンド以上もふとったよ」
異郷で旧友に会って余計親しさをおぼえるものだ。辛梅は魏明に会えたのが嬉しくて、アメリカでの論争と意地で張り合ったときの不愉快さをとっくに忘れていた。彼女は彼に坐るようすすめ、お茶をもってきてあげた。
「私たち、会えるの容易じゃないわね」

彼女は笑っていった。
「午後に通知があったので夕方から家にいて八時からずっとお待ちしていたのよ」
「おやおや、私は二週間前に北京に着いてすぐに、あなたがたに会いたいといっておいたのだ。三日前、南京に着いたとき、かれらはいま連絡を取っているといい、また辛梅は学校でたいへん忙しいとかいって惨々引きのばすのだ。昨晩になってあせちゃったよ。今日の長江大橋の見学の予定をとりやめて、自分であなたがたの学校まで訪ねていくつもりだった。結局、かれらはじゃ今晩ということにした。都合の悪いことに省委員会の送別会があり七時から食べ出して、それが十幾品も出るんだな。ようやく終ったと思ったらフルーツやらデザートやら出て……。時間を見ると九時でしょ。これはいかんと、あわてて席を立った。すまなかったね。で、君たちはほんとに学校のことで忙しいの」
辛梅は新生と顔を見合わせた。「内外別有り」の指示を守り、外事係の人がかれらが会うのを妨害しようとしたことは伏せ、ただうなずいてみせた。
「私は教えているのだけど、彼は教材の改編をやっているの」
「いいじゃない。君たちも随分変ったね。しかし辛梅がこのようにオカッパ頭になったのは小学校のときと同じだ。国内の女性がお化粧をしないのはよい気風だ。人力や物資を節約できて。私は必ずこのことをアメリカにもち帰って宣伝するよ。そうだ、ずっとお喋りして、大事なことを忘れていた。君たちはそろって入党している、と違うか」
返事も聞かないうちから、彼は下を向いて綿入れのポケットから手帳とペンをさぐり出した。
辛梅は口をすぼめ、可笑しそうに新生の方を見た。新生は口をゆがめて苦笑し、答えるのもいやだといわんばかりに、急に顔をそむけた。
「もう何年の党歴になる」
魏明は手帳をひらいて書きこもうとしている。
「魏明、あなたは国内の事情にこんなに疎いの」
辛梅は意外そうに反問した。
「私たちのこのような経歴の人は、一生涯入党なんて考えない方がいいのよ」
「ほんと?!」
魏明は疑うより失望の色を見せた。
「辛梅、あなたは正真正銘の無産階級の出身ではないのか」
辛梅はさっぱりした表情で一笑した。
「どんな階級の出身でも一旦アメリカに留学したら、それはもう〝中毒〟なのよ。無産階級でも資産階級に変ってしまう。思想改造も間に合わない。だから入党なんて思いも及ばない。あなたが入党を考えているのだったら、アメリカで入党することね。帰ってきたら天に登るよりむずかしいわよ」
「へえ。私も考えなおさなくちゃいけないな」
魏明はまじめな顔つきをしていった。

「あなたは台湾人だ。出身もよい。政府は重用しなければウソだ。私が北京にもどったら、きっとかれらに意見具申しよう」
辛梅は笑って、それには及ばないといった。

「台独は一場の春の夢」

話が進むほどに、辛梅は魏明とのあいだに、どうにもならない意見や見方のくい違いがあるのを知って、うとましくなってきた。文化大革命についても、中国の司法制度についてもそうだが、辛梅たちが中国での生活に耐えきれずに、ひそかに脱出を考え始めているのを知らずに、魏明は次のようなことをいって、辛梅をおこらせる。

「かれらは観光に帰国した友だちに出会うと訴える。その影響はよくないよ。生活が慣れないとか。そりゃ帰ってきていくらもたっていないからね。あとで慣れることだってあるじゃないか。君たちのように結構うまく住んでいるのもある。もちろん国内は苦しいよ。欠点や錯誤もある。やむをえないことだ。アメリカだってあるもな。かれらはまた中国には法制がない、非民主的だ、人権もないという」
「あなたはあると思うの」
辛梅は我慢できずに半畳を入れた。魏明はとたんに言葉につまった。そして険しい表情をして強い語気で
「何千年もなかったのだ。今なくていけないものでもなかろう。あなたは歴史を専攻したのだから、私よりもくわしいはずだ。どんなよい王朝でも専制政治を行なわなかったものはない。人口がこんなに多いし、科学もまた遅れている。専制独裁でなければそれこそ一片の散砂になる。国家富強のためには個人は犠牲を払う必要がある。そうじゃないか。あれも欲しいこれも欲しいというわけにいかない。お腹が一杯食べられないでは、自由も人権もヘッタクレもない。私はそう思う」
このテの理くつは辛梅を唖然とさせた。彼女は坐りなおし、手を片方の耳にやって、何か聞きもらしたのではないかと自分の耳を疑った。
十年前、魏明が台湾の独立を鼓吹したとき、スローガンは自由民主だった。時代は進んだというのに、彼はあともどりしてただパンを顧うようになった。一番カンにさわったのは、話をするときのあの口ぶりだ。自分は局外者で、あたかも八億の人民は卑賤でそして落伍しており、無知でだから自由と民主を享受するに当らないといわんばかりである。あたかも飢えさえしなければ、凍えさえしなければ、人民はそれで感激して涙を流し、万歳を叫ぶのがあたりまえだといわんばかりである。これこそ中国人民に対する最大の侮辱である！
ここまで考えると、彼女は急に怒りがこみあげてきて、胸の中は江河が波を打つごとく、大声で咆哮して叱りとばしてやれないのを残念に思った。……魏明はいい気なもので喋り続けた。
「方正がまた中国を出ていくとなると、国家の名誉にとっても一種の打撃になる。出国しても問題は多い。生活がもっとも切実な

問題だ。全世界不景気で、いたるところ失業騒ぎだ。その上にインフレだ。こんなことは君たちも知っていよう。アメリカは天国ではない。博士さまは掃いて棄てるほどある。仕事が見つからない。レストランに行って皿洗いするのもあれば、ガソリンスタンドで働くのも多い。中国だけがほんとに生活の保障された国だ……」

辛梅は勝手にいうだけいわせ、もう反駁しなかった。何年か前のようにアメリカにおったとしたら、きっと彼と大論争したにちがいない。

同じ学校に通ってから、彼女はずっと彼とやり合ってきた。一度だって意気投合したことがない。大学時代。楊義勇はずっと彼女に味方して魏明と対立した。アメリカに渡ってから辛梅は孤軍奮闘に変った。

魏明の父親は日本時代二百甲歩の土地をもち、中程度の地主であった。「三七五減租」と「耕者有其田」政策が実施されてから、土地は株券に変り、株券はインフレでホゴ同然になって、一家は没落した。これが魏明の国民党を恨む基礎である。彼が独立運動をやるのは、いつか捲土重来して大地主になるためだと辛梅はあてこすりをいったことがある。

楊義雄の父親は小学校長であった。二・二八でつかまえられ銃殺された。母親は草屯の田舎に帰って百姓をやり、苦労して彼を育てあげた。父の仇を報ずるために、楊義雄は台湾を離れるやすぐに「台独」組織に入った。彼が辛梅と論争するのは理論にもとづくのであって、魏明のように簡単にレッテルをはり、彼女が台湾は中国の領土の一部だということに賛成するのは「台湾人の叛徒だ」、左傾思想は「アカの残滓だ」というのと違う。今日、魏明はむやみやたらに人にレッテルをはらなくなったが、しかし調子のいいことをいって、とどまるところを知らない。ただ中身を変えただけのことではないか。

夜がふけた。魏明は手のタバコをもみ消し、去りがたい様子で別れをつげた。

「あなた、楊義雄が何をしているか、知ってて」

辛梅は旧友のことを聞いた。

「二年も行き来していない」

魏明はいかにも残念そうにいった。

「彼はまだ独立運動をやってるんだ」

辛梅は驚いた。

「なぜなの。あなたがたはいっしょに左転(てんこう)したのじゃないの」

「ま、ま。楊君の頑固さはもういわんことにしよう。左転だって。そうね、左転というなら、彼は『台独』の中の左派だよ」魏明はオーバーを着ながら、バカなやつといわんばかりにしきりに舌打ちをした。

「台湾の独立は一場の春の夢だ！」

彼は押し殺した声でもう一度辛梅にいった。

「中国が国連に入ってしまうと、アメリカと日本は支持する勇気がなくなったから、『台独』は潰れるしかないのさ。ときを知るものを俊傑となす。楊義勇は『台独』をやめないばかりか、社

会主義のスローガンまで唱え出した。おかしいと思わないか。社会主義をいい出さなかったら、蔣政権ばかりでなく中国だって引張りこもうとする。ひとたび社会主義をいい出したら、こちは忽ちお前を目の上のコブと見る。楊義雄のコンクリート頭は全く処置なしだ」

「彼の政治嗅覚はあなたほど鋭くないのよ」

辛梅は同意した。

「あなたは私たち国内でいうところの変色竜(カメレオン)よ。いつまでも情勢と潮流についていけるわ」

魏明は得意気に笑った。ほっぺたに幾重にもシワが寄った。彼はトランクをもちあげ、カメレオンの真意を確めようと思った。そのとき、新生が懐中電筒をつけて外に出る様子を見せたので、しかたなく辛梅と戸口で別れた(七八年三月号、十五回)。

長文の引用をいとわなかったのは、陳若曦のこれまでの小説やエッセーの中で、この部分が台湾人としてもっとも重視に値すると思ったからである。陳若曦の独立運動に対する見方を知る上で重要であるばかりでなく、彼女の中国的世界観の片鱗をうかがうことができ、さらに中国を脱出する原因も中で示唆されている。

楊義雄は魏明に比べればまだ好意的に描かれている方だが、独立運動をやる共同の動機として、一方は没収された田地を取りかえすため、一方は父の仇を報ずるためと、私利や怨恨の低い次元のものに解釈されている。『台湾青年』は日本語で書かれているから無理としても、中文の『台独』や英文の Ilha Formosa や Independent Formosa 等、アメリカでも何種類かの独立運動の機関誌が出ている。陳若曦は全くそれを読んでいないか、もしくは読んでも理解しようとしないのか、情なくなる。

独立運動で中国に投降したものは、私の知る限りではない。独立運動者は徹底して反中国である。中国の台湾併合の野心を誰もが知っているからである。魏明とのやりとりは、陳若曦の「想定問答」であって、小説としてはおもしろいが、独立運動者としては不愉快だ。

楊義雄のように独立運動者で社会主義を唱える人は現実にいる。しかし私は、独立運動は台湾人が中国人の植民地支配から翻身(だつきゃく)しようとするナショナリズムの戦いであって、社会的・経済的制度を議論するイデオロギーとは次元を異にすると考えている。

現在の国際情勢の下で台湾の独立を追求するのに、イデオロギーを前面に押し出して、そこにどんなメリットがあるか、冷静な衡量が必要であろう。陳若曦が魏明の口を借りて、社会主義を唱えることは、中国にとっても邪魔な話だといったのは一つの参考にすることができよう。

歴史と政治を知らない

『尹県長』自序の中で、陳若曦は次のように述べている。

以前わたしは、中国人であることは、これは生まれたときからそうなのであって、当然であり、選択できなかったことだと考え

ていた。この数年をへて、わたしははじめて理解した。

――中国の民衆は、悲にして壮、愛すべく敬うべきであって、たとえもっとも平凡な人間であっても、その人間は数千年の歴史、文化の結晶であって、尊厳なのだ、なんらかの専制的政治制度によって変えられるものではない、と。（竹内実訳『北京のひとり者』二三八ページ）

陳若曦はこれで自分は中国人を裏切ったのでないことの弁明にするつもりかもしれないが、少女的感傷もいいところで、歴史を知らないし、政治を知らない。

「イワシの頭も信心から」という日本のことわざがある。陳若曦が「生まれたときから中国人で、そして選択できないもの」と信じこむのは勝手だ。しかし台湾人はみなそうだと拡大解釈されると困る。

歴史的事実として、陳若曦は生まれたときは「日本籍の台湾人」で、七歳のとき「中国籍の台湾人」に変った。生まれながら中国人であったのではない。台湾を領有した日本は台湾人を日本人につくり変えようとした。同様に台湾の施政権を得た――台湾の帰属は未定である！――中国は台湾人を中国人につくり変えようとした。支配者はそのために強権をふるい、教育に力を注ぐ。日本の場合だけを愚民政策、奴隷教育と非難するのは当らない、蔣政権の場合は賢民政策、主人教育だというのか。

結果からすると、日本は失敗したのに反し、蔣政権は成功をおさめつつあるように見える。別に異とするに足りない。台湾人の祖先は中国大陸から移住したのだし、言語や風俗習慣など先天的に後者に有利にできている。しかも台湾人の前に臨んだ両国の姿勢に大きい隔りがあった。日本が突如として猛々しい外来支配者として乗りこんできたのに対し、蔣政権は待望久しき解放者としてやってきた。

日本に頑強に抵抗した台湾人も、蔣政権にはノーズロ式の歓迎ぶりを示した。そのあとですぐにだまされたとわかった。それで二・二八が起ったのである。二・二八が台湾人に与えた精神上、肉体上の衝撃は計り知れない。だから陳若曦の小説で二・二八に触れないものはないのである。

一部の台湾人は二・二八から蔣政権のみならず中国人の本質を見抜き、台湾人はすでに中国人と異なる民族であるという自覚をもって、独立運動に挺身した。その他の多くの台湾人は、蔣政権の下で自由と民主を要求する「条件闘争」を展開した。そしてそのカタストロフが美麗島事件である。

「悲にして壮、愛すべく敬うべき」は中国の民衆に限ろうか。台湾人もまたそうではないか。いや、世界のどこの国の民衆も同じである。まさか中華思想で「数千年の歴史と文化の結晶」でないと、「悲にして壮、愛すべく敬う」価値がないというのではあるまい。「照顧脚下」台湾に生を享けたものなら、まず台湾人の血みどろの戦いに目を向けてほしいのである。

蔣政権が二・二八のあとなお三十年あまり政権を維持できたのは、特務、警察、軍隊を増強して台湾人を威圧したほかに、中華思

想教育を強化して、台湾人を精神的にスポイルするのに成功したためである。中共政権がまた間接的に蔣政権を支援した。

中共政権の支援とは、一つには「台湾は中国の一部である」と蔣政権と口裏を合わせることによって、国際的に独立運動を孤立せしめ、多くの台湾人に中国の羈絆から脱することの困難を思わせたこと。二つには、大陸で暴虐非道な政治を行って、台湾人に蔣政権の方がまだマシと、現状に甘んずる姑息な心理を植えつけたことである。

小さな島に生まれ、次々に支配者を迎えなければならなかった悲運から逃れたいという台湾人の願望につけこみ、「同じ黄帝の子孫」「祖国の温いふところに抱かれよ」といった教育宣伝が朝から晩まで毎日毎日、三十年間も続けてやられては、たいていの人は「そうか、そうかもしれない」と信じてしまう。信ずるまでに至らなくても四百年の屈辱の歴史よりは四千年の光輝ある歴史、狭い海島よりは広大な大陸、話せず書けない台湾語よりは身につけた中国語が便利だ、といった打算が働く人もあろう。

教育宣伝で頭がイカレタのは手の施しようがないが、打算に対しては、次のようなことを指摘して再考を促したい。

屈辱の歴史がいやなら、これから栄光の歴史を創造すればよいのである。アジア・アフリカの新興諸国はみなその意気ごみでやっているではないか。国土は広いにこしたことはないが、狭ければ狭いなりに利点もある。中国は台湾の三百倍近い一千万平方キロの広さがあるといっても、半分は不毛の地で、残り半分に十億の人口がひしめいている。かれらの生活は貧しく文化も低い。それで中国研究者に「大陸砂漠論」を唱える人もいるほどである。張俊宏はすでに『這一代』二号(七七年八月)に「大陸文化乎海洋文化乎」を書き、海洋文化は大陸文化に比べて格段にすぐれ、大海は富強の能源といったが、さすがに展望をもっている。

台湾語がロクに喋ないのはやむをえない。日本語と中国語に八十年間も圧迫されたのだから。書けないのは勉強不足のせいであって、これも独立して、教育研究に力を注げばすぐに解決する。何が何でも漢字で表記しなければ気がすまない中国人のやりかたを真似てはいけない。かれらは漢字を中国文化の精華と自慢するが、中国は実は漢字のために近代化が遅れたのである。

台湾が独立すれば、中国文化と断絶し、中国語も禁止されると恐れる必要は少しもない。台湾人は中国人とは違う民族であるが、漢族の一支であることは厳然たる事実である。アメリカ人はイギリス人と違う民族であるが、同じアングロサクソン族に属する。漢族の文化は台湾人もこれを受け継ぐ。中国が本家ならこちらは分家といった関係になるだろうが、分家だとしても少しも卑下するに及ばない。本家が没落し分家が栄えることも世の中にはよくある。漢族の文化のほか、台湾には日本の文化や欧米の文化の影響が入ってきている。われわれはそれらを正当に受けとめ、融合して新しい台湾文化を創造するのである。

中国語はそれを禁止する理由はない。だいいち不可能である。かなり長期間、台湾語と中国語が並存することになろう。台湾語で発表したい人は台湾語で発表すればよく、中国語で発表したい人は中

国語で発表すればよい。

独立運動は決して中国人を排斥するものではない。蔣政権は台湾の独立は二百万の中国人を台湾海峡に叩きこむことだといっているが、それは中国人の敵愾心をあおる宣伝である。独立運動者がそんなことをいったことは一度もない。

中国人が台湾独立に協力すれば、独立のあかつきわれわれはかれらを台湾国民の一員として扱い、何ら差別することなくともに自由と民主を享受したいと思う。だから陳若曦が中国人意識をもとうと、われわれの独立運動に参加する道はひらけているのである。もっとも望ましきは、彼女が台湾人意識をとりもどすことである。

≪台独≫ 目録 1980年9月号

蔡文金……為謝雪紅同志復仇！

洪哲勝……"我要做中国人！"

蕭欣義……八十年代的台湾

柯　柏……和偶爾看看台独月刊的朋友們談台独

許信良……高雄事件後台湾前途的展望

祝台立……組織羣衆的革命工作㈢

≪台独≫ 目録 1980年10月号

張燦鑅……信心与人民

羌　昌……我看選挙罷免法

洪哲勝……駁蔣家謊言——兼論台湾和中国的関係

林宗光……台湾人的意識

李長春……反核染、救台湾

仁　全……我旁観了高雄事件的司法審判

吃狗客……従光華社改選談起

大龍峒……光華社醜史

祝台立……組織羣衆的革命工作（四）

≪台独之声≫

台湾語で最新の台湾情報をお伝えしています。

第一号　東京（〇三）三五一—六五一〇

第二号　東京（〇三）三五九—九四七一

台湾、今日このごろ

聯盟と美麗島社「選挙」で共闘

党外民主闘士の「中央民意代表」の選挙運動を支援するため、聯盟と美麗島雑誌社は、十一月八日、連合して「選挙期間島内工作指揮センター」を発足させた。「指揮センター」はロスアンゼルスに設置された。責任者は聯盟主席張燦鑾、副責任者は美麗島雑誌社々長許信良氏。「組織」の聯盟と「広報」の美麗島社が提携した点で、その意義は大きい。

全米台湾同郷会、「選挙」支援の募金運動

全米台湾同郷会は、台湾の民主運動に深い関心を示し、党外民主闘士の選挙運動を支援するため、このほど、全米台湾同郷向けにカンパを呼びかけた。同会は過去の選挙でも同様なカンパ運動を行ない、相当な金額を集めて島内に送り込んだ実績がある。

島内外の台湾人が協力して、反蔣政権に立ちあがることをもっとも恐れている蔣政権は、今度の「選挙罷免法」の改悪の中で「海外から選挙資金の援助を受けた候補者は、五年以下の懲役に処する」、という一項目を入れることを忘れなかった。そのため、今度のカンパで集った金は、選挙後の訟訴費用にあてることになっている。過去の例からみても、国民党員候補が落選した場合、党外候補の「当選無効」訴訟を起こすなど、トラブルがつきものだからである。

身勝手な「外省人」立候補

十二月に行われた「増額議員」選挙における立候補者は、立法委員一八六人、国民代表二一八人の計四〇四人。うち外省籍が四一人いた。

国民党は「大陸の選挙が共匪に占領されているため改選不可能」という理由で、一九四七年に大陸で選出された議員（のちに定員不足のため、当時の落選議員までをくり上げ当選にした）の改選を認めず、万年議員にしておきながら、「外省人」が「台湾地区」から立候補することは野放しにしている。こんなことが許されるのなら、理論的には全議員を台湾で改選することもできるはずである。

もちろん、両議会の八十五パーセントを占める万年議員が国民党の「多数」を守っているのだから、彼らがそんなことをやるわけもないが、万年議員の平均年齢はすでに七十五才をこえており、国民党はなんらかの新手をあみ出さなくてはならないところに追い込まれている。

康寧祥氏の選挙ビラ没収さる

党外人士の有力リーダーで、現職の立法委員として、今回も立候補した康寧祥氏の宣伝ビラが、製作と同時に警備総司令部に没収された。宣伝ビラのタイトルは「一個小市民与老長官的政治対話」（一人の小市民と軍隊下層幹部の政治対談）。没収の理由につい

て、警備総司令部は、ビラの内容が軍部の教育および組織を批判しているためと説明しているが、康氏が記者に明らかにしたところによると、宣伝ビラの主たる内容は、目下、台湾でよく議論されている「米国式民主主義」、「政党政治」、「分岐分子」等の名詞に対する討論にすぎないという。

康氏は現在党外において、もっとも知名度の高い台湾人青年政治家だけに、蔣政権下での風当りが人一倍強いのは容易に想像できる。国民党は今度の選挙で、あらゆる手段を講じて、彼を落とそうとした。

長距離バス爆破さる

十月上旬、桃園県大渓の近くにある蔣介石の霊園が爆破された事件は、台湾では一切報道されなかったが、今度は長距離定期運行バスが、十一月十七日、二十二日と二度にわたって爆破され、数人の乗客が重軽傷を負った。

縦貫高速道路ができあがってから、台北――高雄を往復する「中興号」と「国光号」の定期運行バスは、鉄道と並び南北を結ぶ交通機関として利用されてきた。

一回目は十一月十七日「中興号」が楊梅料金所の近くを走行中に突如爆破が起こった。二回目は、十一月二十二日「国光号」が苗栗インターチェンジの近くにさしかかったとき爆破された。

当局の調査によると、二回の爆破状況はほとんど類似しており、爆発物はいずれも手製の小型爆弾という。当局は爆破事件を単なる不良少年のいたずらと断定している。「中興号」と「国光号」の定期バスはいずれも、「台湾汽車客運公司」に所属するもので、経営権は国民党が牛耳っているが、たんなる「いたずら」でこんな事件が起こるところに、問題の深刻さがうかがえる。

二〇八億元の追加予算

〝行政院〟はこのほど二百零八億一千一百万元の「追加予算案」を〝立法院〟に提出し、審議を要請した。なお、一九八一年度（現在執行中）の国家総予算は、元来二千五百四十二億四千三百十七万五千元。追加予算はおもに㈠基層建設、㈡電源開発、㈢交通建設、㈣農業発展、㈤公務員の賃上げにあてられる。停滞気味の景気に対するテコ入れが狙いである。

どうなる人口問題

今年一月から九月までの出生統計によると、平均七十九秒ごとに一人の赤坊が誕生した。即ち、一時間ごとに四十六人、毎日千九十八人の赤坊が出生したことになる。

現在台湾の人口密度は、一平方キロにつき四九二人で勿論世界のトップ。

国府はことあるごとに「節育」を呼びかけてはいるが、これと言った有効かつ具体的な方策を持たない。事実上、人口無策と言っても決して過言ではない。（H）

「随筆」

いつか来た道 (19)

孫　明　海

「いつか来た道」を歩くとき、いつか嗅いだあの匂いが漂ってくる。

月曜八時からの「水戸黄門」は、長年にわたって驚異的な視聴率をつづけている。当節最高の人気番組だという。「あんなものがねえー」と一言のもとに斬りすてて、〝インテリ〟であることの自己証明をしたいところであるが、私もときどき視聴率の向上に寄与していないでもないので、そうもいかない。

〝あんなもの〟は決して見ない方々のために少々解説を加えておくと、むかしむかし、あるところに悪代官がいて、百姓を苦しめては私腹を肥やしていた。そこへ物見遊山の隠居姿に身をやつした黄門が助さん格さんをひきつれて登場、悪者を退治してめでたしめでたしとなる毎度おなじみの話である。

代官が城代家老になったり、百姓が町人になったり、場所と人物の設定はいろいろと変っても、プロットのこの基本的なパターンは動かない。私の知合いの女性に、映画を見にいってハッピー・エンドにならないとお金を損した気がするとのたまわった人がいるが(なぜかこの人、大学教師なのだ!)、「水戸黄門」なら彼女を損させることは決してないであろう。私はなぜか、こういう発言をケロリと言ってのける女が好きである。

今年中学三年、いまが生意気ざかりの長女に言わせると、「水戸黄門」のこのワンパターンが何とも言えないのだそうである。おかげでわが家では、あれは一種の〝視聴者参加番組〟になっている。

たとえば、八時も四十分をまわるころになると、毎度おなじみの話もいよいよクライマックスに近づく。ともかく、〝正義の味方〟というものは一旦ピンチにおちいらなければ恰好がつかない。じりじりと四方から迫ってくる悪者どもの鋒先……。あわや水戸のご老公絶体絶命と見えしが、おっとどっこい、助さん（または格さん）かくし持った葵の紋所の印籠を高々とかかげ、足をぐいとふんばり目を大きく剝いて見えを切る。とたんに、待ってましたとばかり、わが娘大音声をあげるのである――「ものども頭が高い！ひかえい、ひかえい！」

これがまた絶好のタイミングで、ぴたり決まるのである。

「へへーい」と悪代官、一度は平身低頭して恐れ入るものの、本心はすこしも恐れ入っていない証拠に、ときどき上目づかいにあたりをうかがうものと相場がきまっている。案の定わが悪代官、一味の者に目くばせするや否や、やにわに起きあがって刀を抜く。そのタイミングをのがさず、わが娘ふたたび黄色い声を張りあげるのである――「ええい！かまわぬ、斬れ、斬れ！」

すると、あーら不思議、画面の悪代官、わが娘の真似をして、そっくりそのままのセリフを吐くのである。私は腹をかかえてゲラゲラ笑いだす。笑いがやっとおさまるころには、悪人みなお縄をちょうだいして、めでたしめでたしとなるという寸法である。

私はTBSから金をもらってこんなことを書いているわけではない。実は、このところ中国国内の実情が少しづつ伝えられるようになってきたが、私はしばしば、そこにテレビの「水戸黄門」の世界を連想してしまうのである。

ひところの、正に〝歴史的〟ともいえる偏向報道への反省もあろうが、最近の日本の新聞は、中国報道に関してはだいぶ正常な感覚になってきた。国交正常化に遅れること約十年、新聞界もここでやっと自らの〝日中正常化〟にこぎつけた感じである。このごろは、よい面も悪い面も含めて、生きた中国の生々しい姿がわりとよく伝わってきているように思われる。そう感じるのは、近ごろの中国報道からは、中国と中国人の匂いがさかんに漂ってくるようになったからである。私は鼻をクンクンさせて、「これは本当だ」とうなづくことが多くなった。幼いころから身に泌みてよく知っているあの匂いだ。間違えるわけがない。

あえて言うが、私は新島淳良先生や野村浩一先生の大論文よりも、一貫して自分の嗅覚を信じてきた。人間の嗅覚よりも緻り方の能力の方が高級だと思いこむのは、日本の〝インテリ〟によく見られる偉大なる錯覚であろう。

この中国の〝匂い〟ないし〝臭い〟を一言で説明するのはむずかしい。あえて言うなれば、「封建社会の匂い」とでも形容できようか、伝統的な帝王専制政治の風土と、儒教的全体主義の思想的桎梏。合従連衡、離合集散を無限にくり返した内戦の歴史。権謀術数に明けくれた隠微な権力闘争。根強い郷党意識。それを裏がえしにした人間の相互不信。抜きがたい官尊民卑思想と官僚の腐敗。なりふり構わぬ縁者登用の慣行と権力の濫用。強者の驕りと専横。弱者の事大主義と面従腹背――その一つ一つが何千何百年の歳月の中で

徐々に熟成され、かの地の人々の意識の底に深く静かに沈潜しているのである。

因襲、宿弊、陋習、教条、禁忌――これら数えきれぬ積年の澱を呑みこんで暗く淀んだ、巨大な古沼のような風土。その測り知れぬ混沌。その中から、いわばメタンガスのように立ちこめてくる饐えた匂い、私が「封建社会の匂い」と呼んだのはこのことである。

「水戸黄門」を見たことのある読者なら、そこに登場する悪役、つまり代官なり奉行なり家老なりが、まるで絵にかいたような悪であることに気付くであろう。昔なら進藤英夫郎、いまなら南原宏治といった役者の、いかにも憎々しい面構えがすぐに連想されるのである。彼らは百姓から重税を取りたて、私腹を肥やす。権勢を笠にきて人様の妻や娘を辱しめる。暗愚の主君を甘言であやつって、権力をほしいままにする。江戸表の殿様には虚偽の報告をして、国元の公金や資材を流用着服する。これを批判するものがいれば容赦なく逮捕、投獄して、その口をふさぐ。ときには無辜の人間に自分の罪をなすりつけて、これを殺す。

悪行のバライアティはまだいろいろとあるだろうが、いくら物好きの私でも毎週「水戸黄門」を見ているわけではない。もちろんテレビの「水戸黄門」はすべて作り話である（ほんとうは、徳川光圀が諸国を漫遊したという史実さえないという）。しかし、あのようなおとぎ話にも似た他愛のない話が、ありとあらゆる豊かなバライアティをともなって手軽に拵えあげられ、一応はプロローグもエピローグもあるドラマの体裁で、面白おかしい娯楽番組となりうるためには、どうしても封建社会という時代設定が必要なのである。

あの手の話のほとんどは、極悪非道の役人が善良な庶民を迫害するという図式をとっているが、そのすべては、人権意識と法制度が確立された近代社会では起り得ない性格の事件だといってよい。役人に代表される体制側が一般の庶民に対して絶対権力を有し、庶民を蟲ケラ同然にしか見ようとしない感覚があるからこそ――そのような時代背景を設定しているからこそ――脚本家はどのような荒唐無稽なプロットでも自由自在に構築し、うんと〝面白い〟話を作ることができる。

これが、時代背景にいまの日本を想定したりすると、もうまったくお話にならない。自分を番屋にしょっぴいた悪同心にむかって、「恐れながらあっしにゃ、黙否権というものがあらぁな」と長屋の八さんがうそぶいたり、熊さんが急いで自由人権協会かなんかに駆けこんだりしたのでは面白くもおかしくもない。

絵にならんのである。権勢を笠に婦女子を辱かしめる悪代官などというと、いまではせいぜいかの安川輝夫サンを連想するしかないが、あのノッペラ優男の安サラリーマン風判事ドノでは、イメージが狂ってしまうのである。

ところで、この「水戸黄門」、もう十何年ものあいだ毎週毎週つづいている。いくら自由奔放な構想が許されるとしても、話の種に苦労することもあるのではないかと想像する。そのようなとき、新聞の中国報道からネタをさがすことを脚本家諸氏におすすめしたい。「水戸黄門」よりももっと〝面白い〟話が四百余州いたるとこ

ろにころがっている。まことに、「事実は小説より奇なり」なのである。

このあいだ、北京からの外電で、商業大臣の王磊が指弾を受けたという話が伝えられた。長年にわたって、一銭も払わずにレストランで飲み喰いしていた事実が、一人のボーイの告発によって明るみに出たのであった。まことにミミッチイ話であるが、これは中国の官界では、上は大臣から下は警察官に至るまでみながやっている、すこぶる常識的な慣行なのである。恐らくこの大臣はタダで買物をしたり劇場に入ったりもしたであろう。

また、同じことをするのは商業大臣だけとはかぎるまい。北京では、この事件について、大臣がこんなあざとい真似をしていたということではなく、一介のボーイにそのような勇気があったということが、もっぱらの話題になっているということである。

似たような話だが、上海に住む一人の喰いつめた若者が、さる将軍の息子であるとデタラメを名乗ったところ、入手困難な汽車のキップを何枚も贈られたばかりか、人々はきそって彼に金を貢ぎ、はてはチャーミングな女性まで献上されたという。昨年の夏ごろ新聞に出ていた話だから、覚えている方も多かろう。これなど、ちょっとゴーゴリの「検察官」を思わせるまことに大時代的な話で、すぐにでも「水戸黄門」に使えそうではあるまいか。

中国(マンダリン)の官僚が役人風を吹かせてタダメシを喰うことなど。むしろかわいいくらいのものである。ペテン青年の話も、共産主義現代中国に根強く残存する封建性を見事にえぐり出したユーモラスな諷刺小説の趣きがある。この程度のことなら害も少ないのであるが、いかにも封建社会の暗黒と非人間性を暗示するような陰惨な話も多い。

その中の少なからざる部分が「冤枉」のカテゴリーに入るのではないかと思われる。日本で単純にいうところの「冤罪」とは少し趣きが違って、これはデッチ上げはもとより、誣告、讒謗、歪曲、付会、難癖、偽証、転嫁などありとあらゆる手法を駆使して、人に罪を着せて葬り去る中国人の伝統的なお家芸で、古来から戯曲や物語のプロットに数多く使われてきたモチーフである。スパイ呼ばわりされたあげく、事実上殺害された劉少奇の場合をはじめ、文革中の犠牲者がほとんどこの手でやられたのは周知のことである。

最近の中国報道の中にも、このパターンの事件はしばしば見うけられる。たとえばこの間のニューズウィーク (Nov. 24, 1980) には、自分の工場で使う金塊八〇六オンスを盗んで処刑された工場長の話がでている。この男、自分は知らぬ顔をきめこんでいたばかりか、工場の他の職員に罪をかぶせてこれを告発し、二人の無実の人間を自殺に追いこんだのであった。これとは別の事件であるが、上司の汚職を告発しようとした二人の若い女性が迫害を受けて自殺したとか、人民公社での横領事件を上級機関に報告しようとした農民が党幹部によって拷問を受けたとか、「水戸黄門」よりもむしろ「必殺仕掛人」なんかの方に似合いそうな話も多い。

私が台湾大学にいたころ台北で起こった一つの事件は、このたぐいの陰惨な話の極(きわ)め付といえよう。蔣政権の軍隊のある中堅将校が公金を横領して発覚した。軍人であるから軍法にかけられる。裁判

を有利に運ぼうと、将校の美貌の妻はワイロをもってときの軍法局長をたずねた。局長は女にからだを要求し、女は泣く泣くこれに応じた。局長は故意に裁判を長びかせ、女に希望をつながせるように仕向け、それをエサに女との関係を続けた。

しかし後日の面倒をおそれた局長は、女との約束を破って、公金をいくらかくすねた程度の罪に対して銃殺の判決を下し、この将校を処刑してしまった。欺されたことを知った女は、警察や司法機関などに泣訴したが、飛ぶ鳥を落す軍法局長の権勢を恐れて、だれも彼女の訴えを取りあげようとはしなかった。そのうちに、自分の身に危険を感じるようにさえなった女は、最後の手段として、蔣介石への直訴を試みた。台北近郊の陽明山の住まいから台北へ向けて下山してきた蔣の乗用車の前に、訴状をしっかり胸に抱いた女が飛びこんだのであった。数日を経ずして局長は銃殺された。私と同世代の台湾人はみなが覚えている有名な事件である。

局長の悪業はもとよりであるが、直訴という前世紀的な手段、そして皇帝のツルの一声で事件が即座に解決し、四の五の言わさず悪人をたちどころに処刑するこの「水戸黄門」的な〝善政〟に私は暗澹たる気持であった。

この「封建社会の匂い」を吸って、私は台湾で育ったのである。いま「いつか来た道」をもう一度歩いているとき、大陸から伝わってくる同じ匂いに私は敏感にならざるを得ないのだ。

（続く）

≪台　独≫　目　録　198[illegible]年11月号

王 永 生……労工与民意——従台湾官方的民意調査談起
黄 月 潭……剖析島内居民的両種心態
洪 海 星……台湾独立建国以後、如何提高大学教授及研究人員的素質
[illegible] 敬 元……台湾没有刑求？
詹 化 民……踏不死的野花——謝雪紅
洪 哲 勝……中共支持台独的歴史不容篡改！
韋 独 立……西蔵要求独立
台独聯盟……党内党外一条心、民主自由救台湾（島宣文件）
台独聯盟……「本省外省」一条心、民主自由救台湾（島宣文件）
洪 哲 勝……老兵的話（小説）
秋　　心……文化的包袱
祝 台 立……組織羣衆的革命工作

美麗島グループ健在なり

こんどの選挙にあたり、美麗島グループは十一月二十一日に「中央民意代表選挙党外候選人聯誼会」の名称で、「認同声明（アイデンティティ）」を発表し、同聯誼会に加わっている候補者が同一組織に所属していることを内外に示した。いわば「党名のない政党」で以て、国民党に対抗する姿勢を明らかにしたのである。新党結成が厳禁されているにもかかわらず、新党結成の願望がいかに根強いものであるかを示すものであり、国民党の御用団体である中国民社党と中国青年党が一議席も獲得しえなかったことと相俟って、こんご同聯誼会の動向は注目を集めよう。

美麗島高雄事件に名を借りての大量逮捕、党外人士の選挙活動に課された十重二十重の束縛に、三分の一に達する有権者が選挙にソッポを向き、投票率は六十五％にとどまった。「不投票を通じての蔣政権への不合作」の底流の中で、党外人士は、選挙に意義を感じる人たちから、支持票を集めるのだから、二十二人の当選者を得ることのできたことは大勝利である。

こんどの選挙の最大の争点は、軍事法廷で有罪とされた美麗島関係者を台湾人はどう裁くのかにあった。蔣政権も台湾人が選挙を通じて「無罪」の「判決」を下すことを恐れ、「美麗島」と受刑者の名前を、文字や演説で出すことを禁じた。そのため、パンフレットからはこれらの文字が抹消され、演説においても、施明徳氏は「施先生」、姚嘉文氏は「姚弁護士」の形で表現された。それにもかかわらず、民衆はそれが何を意味するかを読みとり、姚夫人の周清玉さんに全台湾の最高票を与えた。民衆は美麗島関係者に「無罪」の宣告をしたのである。

党外人士のスローガンは全般的に高雄事件以前に比して軟くなっているが、それでも「戒厳令撤廃」「民間人の軍事裁判反対」「言論の自由」「特権階級の消滅」などを軸にしている。

得票の計算にはこんど初めてコンピューターが導入された。しかし、インチキ計算は従来の選挙と同じく各地で行なわれた。停電や集計中止が各地で幾度となく繰り返され、いくつかの新聞は、明らさまにインチキ（ママ）だとは指摘しないまでも、「無様だ」と批判している。台南県の謝三升氏は、各投票所の得票を独自に集計し、当選したと思い込んで、「当選」の挨拶をしてまわったが、最終発表は「落選」であった。七七年の高雄市長選挙で十九万票とった洪照男氏は二万票の得票にもならなかった。蔣政権によるインチキの結果である。来年の十一月には「省議員」、県市長の選挙があるが、同じパターンが繰り返されるであろう。

一九六一年11月22日 第三種郵便物認可 一九八一年1月5日（毎月1回5日発行）

No.243 1981. 1. 5

目　録

報　道　美麗島集団大勝——
「中央民意代表」部份改選的結果……1
美麗島集団健在……表Ⅲ

論　説　台湾的社会問題……青木達雄…10
「連繋」戦略論……張昭晋…6
陳若曦的彷徨留下甚麼教訓？（下）…王育徳…13

随　筆　旧路重走（19）……孫明海…28

今日台湾　台湾独立聯盟就島内選挙与美麗島合作奮闘。
全美台湾同郷会展開支援島内選挙募款運動。
「外省人」随心欲為的競選　他……27

台湾青年

月刊 **台湾青年** 第243期1981年1月5日
頒価 US $1.50 ¥200 FF2.00
発行人 王育徳（日本）
編集長 孫明海（日本）
編集委員 范揚東（欧州） 林錦楓（米国）
鐘振世（欧州） 高舜水（日本）
程文宗（米国） 古梨仁（加）
発行所 台湾独立聯盟
WORLD UNITED FORMOSANS FOR INDEPENDENCE
〒162 東京都新宿区富久町33番地
万年ビル 電話：東京（03）351-2757
「台独之声」播送電話：
第1号 東京（03）351—6510
第2号 東京（03）359—9471
振替 東京 44168

台湾独立聯盟総本部・米国本部
W. U. F. I.
P. O. Box 503 Kearny, N. J. 07032
U. S. A.
日本本部
Mannen Bldg., No. 33, Tomihisacho,
Shinjuku-ku, Tokyo, Japan, 162
カナダ本部
P. O. Box 92, Station E. Toronto.
Ontario, Canada
欧州本部
AU BING
Postfach 149,
1091 Wien, Austria
台湾本部 台湾 台北市
南米本部 Saõ Paulo, Brasil